

私の履歴書

前橋 汀子

⑮

ソ連留学は1年間の予定だった。残り時間が少なくなるにつれ、もっとここで勉強したいとの思いが募る。そんなとき母方の祖父が亡くなった。訃報を受けた私は、薄暗い寮の廊下で立ち尽くした。

もっと勉強を募る思い

各地で公演、黄金時代を謳歌

留学延長

私の授業料や寮費

はソ連が国費で負担していた。無料で勉強させてもらっていたわけだが、食費や交通費、音楽会のチケット代などは、祖父からの仕送りが頼りだった。

ワイマン先生に相談した時の私は、深刻な目をしていました。先生が何とかしよう。先生の奔走のおかげで留学延長が認められた。さらに先生は関係機関に掛け

延長が認められていた。

音楽院の計らいで夏休み旅行が企画された。同じようにレニングラードに残された他大学の学生と合同で、黒海沿岸のオデッサまで汽車の旅である。オデッサはオイストラフやミルシテインをはじめ、バイオリンの名手を多く輩出した憧れの街。潮田さんと一緒に喜んで参加した。

切れてしまった。調律師が飛んできて延々と復旧作業をして再開したが、また別の弦が切れた。長身を折り曲げ、作業を心配そうに見守るリヒテルの姿が今も目に浮かぶ。

あのレニングラードの会場にいた日本人は、私一人だと思ふ。その日の自分の服装まで覚えている。母が作ってくれたブルーの服。

1962年9月、2年目の授業が始まった。翌10月、ロ

ストラヴィンスキーが指揮台に現れると、観客は熱狂的な盛り上がりで歓迎した。終

演後も拍手が鳴りやまず、作曲家はカーテンコールで何度も何度も呼び出され、オーケストラの人たちは引き揚げてしまった。

観客もまばらになっ



他大学の学生と旅行に（左から3人目が筆者、左隣は潮田さん）

シア革命の前に亡命していた作曲家のストラヴィンスキーがソ連に里帰りする。半世紀ぶりとなって大きな話題を呼んだ。レニングラードフィルの本拠地ポリシヨイ・ザールで開かれたその公演は超満員で、私は2階正面の立ち見席で聴くことになった。

思い返せば、どのコンサ

ートも最上の内容だった。私が留学していた時期は、まさにソ連の黄金時代だった。

（バイオリンリスト）

お小遣いで、たまには級友にキャビアをこっそり送った。ステージでは着物で演奏したこともある。祖母が「日本人なんだから、せめて一着は持っていきなさい」と持たせてくれた着物で、これが大いに活躍することになった。

2年目に入る前の夏休み。

寮の学生は次々と帰省し、潮田益子さんと私がポツンと取り残された。潮田さんも留学